

ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

粉喰い坂（こくい坂） 義経ひとときの休息



伝説 粉喰い坂（こくい坂）
義経ひとときの休息

紀行 こくい坂 ～義経伝説を訪ねる～
・こくい坂と亀井ヶ淵
・弁慶の重ね石
・国位田碑
・義経の腰掛け石

関連情報 用語解説
参考書籍
所在地リスト

粉喰い坂（こくい坂） 義経ひとときの休息

1184年、播磨（はりま）は、源氏（げんじ）と平氏（へいし）の戦乱のまっただ中にありました。政治をにぎり、栄華をほしいままにしていた平氏に対して、源氏の一族が兵をあげ、その戦いが激しさを増していたのです。

京の都を捨てた平氏の軍勢は、播磨で態勢を立て直そうとしていました。源氏は、平氏をたおそうと、播磨へ攻めこみます。源義経（みなもとのよしつね）は、その源氏の一軍をひきいていました。

義経の軍勢は、丹波国（たんばのくに）から播磨を経て、山間の道を鶴越（ひよどりごえ）に向かっていました。めざすは一ノ谷にある平氏の陣地です。草深い道をぬって、小野の檜山（かしやま）まで来たとき、山のふもとに一軒の農家がありました。道をたずねようと、義経はその前に馬をとめました。

家から出てきた老女は、山ごえの道をていねいに教えてくれました。そのやさしそうなようすに、義経は思わず馬から降りました。何とはなしに、幼いころ別れたきりの、母のおもかげを見たような気がしたのです。全軍に休息を命じて、義経は、そばにあった大きな石に腰（こし）をおろしました。

「せっかくお休みになりますのに、おん大将に差し上げるようなものもございません。このような粉飯（こめし）でよろしければ、どうぞおめし上がりください。」

老女は、さきほどできたばかりの粉飯を、おわんに入れて差し出しました。

一口食べた義経は、「焼き加減といい塩加減といい何とも言えぬ。これから戦に向かう身には、本当にありがたい、思いもかけない幸せだ」と、たいそう喜びました。

その時です。休んでいた兵士たちの間から、「わあっ」という声があがりました。強弓（ごうきゅう）の使い手で有名な亀井八郎（かめいはちろう）が、「行軍につかれた兵士たちのために、もっと水をあたえたまえ。」と神仏に念じながら山に向かって矢を射たところ、その矢が突きささった場所から、きれいな水がふき出して、みるみるうちに泉となったのです。

「これこそ、神仏のご加護があるしるしだ。このたびの戦は、必ず勝つ。」

兵士たちはみな、大いに勇気を得ました。弁慶（べんけい）も、力試しとばかりに大岩を積み上げてみせたそうです。

義経は立ち上がりました。もてなしのお礼にと、老女へ六畝（せ）の田をあたえ、村の役人には、この田から決して税を取らぬように命じました。そして、ひらりと馬にまたがると、軍勢をひきいて勇ましく檜山の坂を登ってゆきました。

しばらくして、義経の軍勢が、一ノ谷で大勝利をおさめたという知らせが、この村にも届きました。そしていつのころからか、義経が登っていった坂道のことを、「粉喰い坂」と呼ぶようになったということです。

紀行「こくい坂 ～義経伝説を訪ねる～」

兵庫県下には源義経（みなもとのよしつね）や弁慶（べんけい）の伝説が数多く残っている。源平の戦いの舞台になった場所であるから、当然といえば当然なのだが、その背景には、やはり一代の英雄への哀惜の念もあるのだろう。小野市檜山（かしま）周辺に残された伝説は、それぞれの場所に伝えられる話が不思議な現実味をおびている。

こくい坂と亀井ヶ淵



こくい坂



こくい坂

こくい坂を訪ねたのは、早朝であった。家々の屋根の向こうに、加古川（かがわ）にかかる朝もやがゆっくりと流れてゆくのが見える。足下の草は朝露を含んで、靴をぬらした。こくい坂は、神戸電鉄檜山駅の南西500mほどに位置する、檜山の南にある丘に登る坂である。竹やぶと雑木に覆われた丘の斜面に、人ひとりが歩けるほどの細い道が続いている。今ではもう、歩く人も滅多になさそうだが、良く手入れされていた。

とても大軍勢が登れそうには見えないが、現在のように道路が整備される前には、これが三木方面へ抜ける道の一つだったのである。

こくい坂から少し奥まった山すそに、亀井ヶ淵がある。あぜ道を歩いて傍まで行ってみると、直径が2mほどの円い水たまりとなっていた。見たところは、明らかに人工の水だめである。それがどうして「矢で射た場所から水が噴き出した」ことになったのだろうか。

山すそだから、もともと水がわきやすい場所だったのは確かだろう。豊かな水量が、いつしか義経伝説と結びついていったのだろうか。もしこの水だめが義経のころにあったなら、兵士と軍馬のために、うってつけの水場になっただろう。

亀井ヶ淵
(説明板)

亀井ヶ淵

弁慶の重ね石

この丘を南西に回り込んだ場所に、弁慶の重ね石がある。山すそに立つ案内の石碑から急な斜面を登ると、雑木林の中に数メートル四方もあるような、巨大な岩があった。丘の骨組みの岩盤が、中腹に顔を出しているのだ。けれど、ちょうどその中ほどに実にうまい具合に水平のきれつが走っていて、まるでそこで積み上げられたかのように見える岩である。

誰でも思わず、「なるほどね」とつぶやくのではないだろうか。もっとも、山を持ち上げようとしたり、怪物を討ち果たしたりした弁慶だから、この程度の岩を重ねるくらいは、朝飯前であっただろうけれど。



弁慶の重ね石

弁慶の重ね石
(説明板)

国位田碑



国位田碑



国位田碑

粉飯（こめし）へのお礼として、義経が老婆に与えた六畝（せ）の田は、江戸時代になるまで免租の田として続いていたというから、それが本当なら400年ほども引き継がれたことになるだろうか。時代が移り、支配者が変わる中で、それほどまで長く続いた理由は何だったのだろうか。

単なる権力者の威光だけでは、とてもそこまでは続くと思えない。村人たちの思いが込められていたからこそ、時代を超えて引き継がれたと思いたい。今はもうその田がどこであったのか知るすべはなく、榎山の村の中には、国位田碑（こくいだのひ）だけが残されている。

義経の腰掛け石



義経の腰掛け石

義経の腰掛け石は、神戸電鉄榎山駅のすぐ傍にある。ちょうどプラットホームの一番北端あたりであるが、そこまで行くには、駅前の旧道を50mほど北に歩き、遠慮しながら民家の庭先を入らなくてはならない。わかりにくい場所だったが、近所の方に尋ねると「ああ、その家をはいるんやで」と教えてもらった。

木立に隠れるように笠（かさ）形の巨石がすわっていて、その前に小さな祠（ほくら）があり、花と線香が供えられていた。

見たところは、古墳の石室を覆う天井石のように見える。かつて榎山には、後期の古墳群があったから、人知れず破壊されてしまったものもあっただろう。その巨石が運ばれないまま残されて、いつしか義経と結びついていったのかもしれないと想像してみた。

榎山に点在する義経伝説の地は、どこもごくささやかな場所である。立派な寺や石造物があるわけではない。けれどもそこに、義経主従への思いを重ねてきた村人たちの歴史が、いつしかその場所を伝説にしていたのではないだろうか。身近にある場所で語り継がれた伝説は、これからも暮らしの中で生き続けてゆくことだろう。



義経の腰掛け石(祠)

義経の腰掛け石
(説明板)

用語解説

【源義経】みなもとのよしつね

平安時代後期の武士（1159～1189）。清和源氏、源義朝（みなもとのよしとも）の九男で、源頼朝、範頼の異母弟にあたる。『平治物語』、『平家物語』、『義経記』などにその生涯が語られるが、記録による裏付けができないものが多い。

頼朝の拳兵とともに参戦し、源義仲追討、平氏追討などに顕著な活躍をしたが、しだいに頼朝と不和となり、平氏滅亡後、頼朝に無断で官位を得たことを契機として対立した。頼朝による追討を受けて、近畿から東北の平泉（岩手県南部）へ逃れ、一時は奥州藤原氏（藤原秀衡、ふじわらのひでひら）の庇護（ひご）を得たが、秀衡の死後、後を継いだ藤原泰衡（ふじわらのやすひら）は頼朝の圧力に抗しきれず、義経を襲撃して自刃させた（衣川の戦い）。

英雄的な活躍と、その後の悲劇的終末から、物語を通じて多くの人の同情を呼び、「判官びいき」といった言葉を生んでいる。

【一ノ谷の戦い】いちのたにのたたかい

寿永3（1184）年に、現在の神戸市西部でおこなわれた源氏と平氏の戦い。この前年に都落ちした平氏は、西国で軍を再編して摂津福原へ進出した。これに対し京都に駐留していた源範頼（みなもとののりより）・義経軍は、後白河上皇による平家追討の宣旨を獲得して京都から福原へ向かい、生田、一ノ谷から大輪田の泊付近に布陣した平氏と戦った。この際、範頼・義経軍は二手に分かれて平家軍を急襲する。物語上有名な、義経による「鶉越（ひよどりご）えの逆落とし」である。戦闘は激戦となったが、平氏は多くの武将を失って四国へ敗走した。

【畝】せ

日本古来の面積の単位。1畝は、約100平方メートル。

参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	ふるさと伝え語り	1998	小野の歴史を知る会	小野市文化連盟
歴史・文化等	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	おの ふるさと マップ 5 いちばを歩く…	2005	小野市教育委員会	小野市教育委員会

所在地リスト



こくい坂と亀井ヶ淵	小野市榎山町
弁慶の重ね岩	小野市榎山町（県道加古川 - 小野線東側）
国位田碑	小野市榎山町（榎山町公民館横）
義経の腰掛け石	小野市榎山町（神戸電鉄榎山駅北西脇）

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日